

序文　オーウエルの本

ネイサン・ウオデル

一九四八年一〇月二二日、ジョージ・オーウエルは（セツカー&ウオーバーク社の）出版者、フレドリック・ウオーバークに宛てて、執筆中の本の原稿が「恐ろしく長い」だけでなく、「信じられないほどひどい」と主張した（CW, 19, pp. 456, 457）。さらにオーウエルは、「この本には満足していない」が、「絶対的な不満があるわけでもない」（CW, 19, p. 457）と付け加えた。問題の本は『一九八四年』（一九四九）である。ウオーバークは、約二カ月後に原稿の報告書を書いた際、次のように述べている。

私が今まで読んだ中で最も恐ろしい本の一つである。（ジョンナサン・）スウィフトの残酷さが、人生を見つめ、それがいつそう耐え難くなりつつあると考える者に引き継がれた。オーウエルはジャック・ロンドンの『鉄の踵』にヒントを得ているだろうが、迫真性と恐怖では、そのかなり重要な作家を凌駕している。オーウエルには希望がない、少なくとも読者に希望——ロウソクのかそげき光ほどの希望すらも許していない

い。ここにあるのは救済なき悲観主義の研究である。もし人間が『一九八四年』を思いつくことができるなら、それを避けようとすることもできると考える以外に、救いはないだろう。(CW, 19, p. 479)

ウォーバーグは自ら書いた、広範かつ概して肯定的な『一九八四年』の報告書が、この「偉大な本」でオーウェルが「始動させた」「巨大な思想の動きをほとんど」伝えていないと感じていた。にもかかわらず、ウォーバーグはこの小説に心を痛め、「今後何年もこのような小説を読まずに済むように」(CW, 19, p. 481)と祈った。同じくセッカー&ウォーバーグ社の重役であるデイヴィッド・ファラーは、『一九八四年』は「感情を揺さぶる力と作家としての技術」において「抜きん出ている」と指摘した。オーウェルは「(H・G・)ウエルズがけつしてやらなかった、空想でありながらも恐ろしく現実的で、そこに住む登場人物に何が起こるのか気になって仕方ができないような世界をつくり上げた」。ファラーはさらに、「もし我々がこの本を一万五〇〇〇部から二万部売ることができなかつたら、射殺されてしかるべきだろう」(CW, 19, p. 482)と付け加えた。

今となつては、ファラーの発言の論調はひどい判断ミスだと思われる。気軽な感じで、オーウェルの絶望の主人公であるウィンストン・スミスの末路を、純粹に商業的な義務と結びつけているからである。それでもファラーの軽口には、二つの世界大戦で疲弊し、その余波でさまざまな種類の政治的コンセンサスが生まれることに不安を感じていた世界の読者にとって、『一九八四年』がいかにかに共鳴しやしいものであったかを想起させる切迫感がある。ロンドンに暮らす読者であれば、空襲、地下鉄の駅を利用した防空壕、通りに見られる瓦礫、配給などは馴染み深いものだっただろう。アンソニー・バージェスが指摘したように、これは「戦時中または戦後間もない時期の」(Burgess, 1985, p. 14) ロンドンの本である。一九五〇年代の『一九八四年』は、ナチズムの敗北を目の当たりにし、ソ連の政治と野望を恐れる人々の懸念に語りかけた。この小説は、オーウェルが別の作品で「修辭的な語り口」(DOP, p. 108)と呼んだものを強く批判する読者に、今も昔も訴える。また、技術の進歩の速

さや、いつそう合理・効率化に駆られる現代社会のあり方に不安を覚える人々の心にも響いた。迫害されている人、忘れ去られている人、希望を持っている人、卑屈になっている人、恐怖に怯えている人に、意義ある言葉を投げかけた。さらに、『一九八四年』は感傷的な思い出話に疑いの目を向け、あらゆる形態の権威主義的ユートピアニズムをも痛烈に批判する。「無傷のままの過去を懐かしんだり、よりよい未来に思い耽ったりして現在の厳しさから逃れようとする努力は、すべてむなし」(Arendt, *OT*, p. xii) と考えるハンナ・アーレントのような懐疑論者たちにとっても、実に真実味があった。この作品は、今も昔も時代を体現する本である。

七〇年を経た今、『一九八四年』の魅力の大部分は、次の事実にある——非常に多くの読者が、この世界の「何かがおかしい」というウインストンの認識、ルイス・メナンドが言うように、「我々は自分たちの人生をコントロールできなくなっている」という認識を共有しているが、徐々に技術に支配されていくという悪夢のような変容に「抵抗するには」人間は「非力だ」と恐れてもいることである⁽³⁾。この小説全体に見られる被害妄想では、愛する人さえ結局は完全に信頼できないが、この記述はソーシャルメディア——多くの人にとって疎外感や不信感を与える手段となっている——の最も深刻な技術的・政治的影響と恐ろしいほど親和している。オーウェルが侮蔑的に描くイングソックの反知性的な政治は、東欧圏の抑圧的な体制の中で生きてきた人々には説得力があり、反知性的ポピュリズムの復活に直面する世界中の読者を魅了している。この作品は、専門家は国家にとって有用であるが、不必要で望ましくないと判断されるとすぐに、追放されるか殺されることを示している。クリストフ・アー・ヒッチェンズがかつて書いたように、『一九八四年』は「隷属のひどい快楽と誘惑」について警告している⁽⁴⁾。これは愛についての本であり、生き延びるために隠れて愛を楽しむことについての本かもしれないが、憎しみが実はサディズムすれすれの愛であることについても考察している。

本書は、世代を超えて脈々と続く『一九八四年』の受容における継承と議論を踏まえ、この小説がどのような書かれたのか、なぜ書かれたのか、何を意味するのか、なぜ重要なのかについて、新たな問いを投げかけてい

る。作品解釈のコンテキスト、作品と切り離せない文学史、作品が提起する切実な問題、ラジオからテレビゲームに至るまで、ほかの種類のメディアに与えた影響などに関する数章ごとで構成されており、意図的に広範な議論を展開している。定番の問題（労働者階級に対するオーウェルの態度、戦後世界の政治的分割に対する不安など）が、新しい問題（悪に対する彼の見解、『一九八四年』の漫画への影響など）とともに提示される。その目的は、権威主義が新たな力を得た時代におけるこの小説の意義について、さらなる議論を喚起することである。『一九八四年』は、ドナルド・トランプや金正恩、「ブラジル大統領だった」ジャイル・ボルソナロ、あるいは「英国首相だった」ボリス・ジョンソンについて書かれた本ではないが、彼らのような人々が、いかに反自由主義的な政治的变化をゴリ押ししうるかについて示唆してくれる本である。この本は、有名政治家崇拜、「戦争熱、指導者崇拜」(NEF, p. 139) について、非常に重要なことを教えてくれる。『一九八四年』は相変わらずオーウェルの本であるが、これらの範疇では次第に我々の本になつてきている。

本書の第一部「コンテキスト」では、オーウェルの小説を社会的観点から理解するための四つの枠組みが設定されている。ナターシャ・ペリヤンの論考「『一九八四年』と教えること、学ぶこと」(第一章)は、当時の学校制度に対するオーウェルの態度や、この小説の政治性と形式の結びつきなどと関連づけながら、教育が小説の中でどのように機能しているかを考察している。ダグラス・カークの「『一九八四年』における仮想の地勢」(第二章)は、永遠に争いの絶えないオセアニア、ユーラシア、イースタシアの政治圏というインスピレーションを与えた、戦後の地政学的発展についての新たな考察である。デイルタ・デ・クリストファアロの「『一九八四年』におけるアーカイヴの政治学」(第三章)は、この小説における記憶の提示と、記録文書の保存および検索の政治的作用を検討する。デイヴィッド・ドワンの「オーウェルとヒューマニズム」(第四章)は、この小説が人権——『一九八四年』が一九四八年二月の世界人権宣言のわずか六カ月後に発表されたことを踏まえれば、オーウェルにとって重要なコンテキストだった——に関する議論だけでなく、人間であることの意味についての議論

にも深く関わっていることを思い出させてくれる。このようにさまざまな角度から見ると、現在の我々の生き方が、いかに遠い昔から解決されていない問題と結びついているかを、『一九八四年』が伝え続けていることがわかる。

このような言い方をすると、『一九八四年』はよく戯画化され嘲笑されるもの、すなわち教訓的な小説——一九二九年のジョン・ゴルドズワージーについてのエッセイで、「単純な物語ではなく、現代生活を写真・批判することを目指した小説」(CW, 10, p. 140)とオーウェルが呼んだもの——のように結局は見えてしまうかもしれない。しかし、『一九八四年』をこのように何かを伝えようとする小説としてだけ捉えることには注意が必要だが、その道徳的な側面を強調するのは必ずしも問題ではない。『一九八四年』において、オーウェルが正義と悪について緊急に述べるべきことがあると考えていたのは確かである。彼は一九四九年七月に出した声明で、この小説は彼の支持する「社会主義や英国労働党への攻撃」を意図したものではなく、「中央集権的な経済が陥りやすい倒錯を見せつけるもの」であり、それは「共産主義やファシズムですでに部分的に実現されている」と明かしている(CW, 20, p. 136)。彼はさらに、「この本の舞台」が「英国に置かれ」たのは、「英語を話す民族がほかの誰よりも生得的に優れているわけではないことを強調するため」であり、全体主義が抵抗されずに進めば、「*anybody*でも勝利する」可能性があることを強調するためだと付け加えた(CW, 20, p. 136)。『一九八四年』は一種の嘆願書であり、読者が自分たちのまわりで成長しつつある初期の全体主義(エイミー・シスキンドが「暗闇への行進中、正常の中に見える小さな兆候」と呼んだもの⁴)を、無関心のせいで見逃すことがないよう求める作品なのである。それゆえ、ウォーバークの主張によれば、『一九八四年』が探求した「危険な状況」から導き出される教訓は「シンプルである——それが起こるのを許すな。それはあなた次第だ」(CW, 20, p. 134)。

あらゆる世代が『一九八四年』をさまざまなかたちで読み、評価してきた。進行する冷戦真っ只中の英国やその他の国で初めて『一九八四年』に出合った読者から、戦後の東欧でオーウェルの本を密かに読んだ読者。九・

一テロ事件直後の政治決定について意見を述べるために、『一九八四年』を求めた読者。この小説の風刺する政治が、少なくとも欧米では、第四五代（現四七代）アメリカ大統領ドナルド・J・トランプの政権下で完全に実現したと思われる後、初めてこの小説のことを耳にした読者。ドリアン・リンスキーは最近、この本は大半の人が覚えているであろうよりも「はるかに奥深く不思議」であるだけでなく、「社会主義者、保守主義者、無政府主義者、リベラリスト、カトリック教徒、リバタリアンなどあらゆる人たちに求められてきた」と主張している⁶。学校や大学のカリキュラムの定番であるこの小説は、多くの若い読者にとって、国家の中で何かが腐っている感覚——この世界が往々にして慎重に構築された嘘からなる場所であり、そこでは現状が要求する物語や統計を疑うことなく受け入れるよう促される——の証明となっている。すでにこれらの問題に注意を払っている読者も、この小説のあくの強い陰鬱さに対して、必ずしも心構えができているわけではない。若いフアンと同じように、大人の読者も『一九八四年』に心をかき乱されるだろう。しかし、大人たち——『一九八四年』が見事に例示する警告の物語から学んでいないように見える——が残した世界を受け継ぐのは、若者たちである。リンジー・ストーンブリッジによれば、この小説の「苦しみの描写は、他者の苦しみが耐え難いものであること、また、私たちを縛るものは政治的イデオロギーではなく、その苦しみに反応する人間の能力であるかもしれないことを我々に思い出させる」⁷。我々は今、かつてないほどそのような能力を必要としている。我々の世界はこれまでになくウインストンの世界に似通っている。「虚偽の噂」(NEF, p. 74)、「継続的に書き換えられる」(NEF, p. 222) 歴史、迫害による衰退の世界であり、ここでは支配する（また支配される）術は、「現実をもてあそぶ」(NEF, p. 223) ことである。このような知識を用いて何をするかは、我々が決めることだ。しかし、この「我々」が誰なのかは複雑な問題である。

『一九八四年』の読者を一般的な三人称複数形で論じると、この七〇年間、多種多様な読者がオーウェルの小説の中に価値あるものや嫌悪すべきものを見出し、それによっていかに広範で予想もつかない読者層が獲得されて